

学長賞

「下町ロケット」 池井戸潤 (小学館)

フードビジネス学科 渡邊洋輝

今回、僕が読んだのが池井戸潤作「下町ロケット」(小学館文庫)だ。この作品は2010年に発売され、第145回直木賞を受賞した作品である。

ストーリーは宇宙科学開発機構の研究者だった佃航平が、死んだ父の経営していた中小企業「佃製作所」の社長となり、社員たちと共に奮闘する姿が描かれている。

この作品では中小企業の苦しい現実もリアルに描かれている。「佃製作所」は主要取引先から取引の打ち切りを突然告げられ、それまで右肩上がりだった業績も一気に赤字へと転落していく。そんな中でも研究を続けようとする佃の姿勢は若手社員たちの反感を買ってしまう。自分の夢かそれとも目先の利益か佃は葛藤する。しかし、大手企業が「佃製作所」の技術を手に入れるため理不尽な手段を使ってきた事で事態は一変するそれまでバラバラだった会社は一つになり、その理不尽な出来事を乗り越えていく。今回、この本を読んで様々な事を感じた。愚直にもものづくりにまい進する姿勢、挫折を味わってなお夢に向かっていく姿にとっても感動した。これから、就活や就職が舞っている僕にとっては仕事に向かう姿勢や覚悟を登場人物から学ぶことができた。

この作品の作者池井戸潤さんはあの大ヒットドラマ「半沢直樹」の作者でもおなじみである。ドラマは理不尽に責任を押し付けられた主人公が復讐するという作品だ。放送当時「やられたらやり返す。倍返しだ!」というセリフはとても有名になりその年の流行語大賞を受賞するなど大きな社会現象を巻き起こした。

この「下町ロケット」の中にもどこか似たような感覚を持つことになると思う。息つく間もなく次々に展開されるストーリー、巨大な権力と戦う姿、仲間との絆。読んでいるうちに次のページへと自然と手が伸びるはず。これから、就職へ向けてスタートする人やまだ将来に具体的なビジョンを持っていない人など様々な人に読んでほしい一冊だ。きっと読み終わった後あなたの中で何かが変わるはずだ。